阡陵

ISSNO-0913-1906

No.22

関西大学考古学等資料室彙報
平成２年11月30日発行

環鈴（Ringed Bells）古墳時代中期

目 次

長門国「赤」と「長登」―白雉改元の故地―…… 2
上海・南市の商船会館…… 4
金石文拓本（龍門石窟資料）…… 7
中国「うるし」の旅－長沙へ－…… 8
一枚の記念写真（京都円山公園の左阿弥における羅振玉の送別会の人々）… 10
第１回「考古学入門講座」開講について…… 14

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町３丁目３の35
Tel 06－388－1121（内線3341）

長門国「赤」と「長登」
－白雉改元の故地－

網干善教

『孝徳紀』白雉元年二月庚午朔戊寅（９日）の条に白雉改元の由来を記録している。すなわち

穴戸国司草壁連醜経、献白雉曰、国造首之同族贄、正月九日、於麻山獲焉。

とある。この白雉が献上されたことにより、その故事と意味について百済君、道登法師、僧旻法師がそれぞれ所見を述べ、「休祥」ということになった。

これをうけて、甲申の日（15日）に

朝庭隊仗、如元会儀。左右大臣百官人等、為四列於紫門外。以栗田臣飯虫等四人、便執雉輿、而在前去。左右大臣、乃率百官及百済君豊璋・其弟塞城・忠勝・高麗侍医毛治・新羅侍学士等、至中庭。使三国公麻呂・猪名公高見・三輪君甕穂・紀臣乎麻呂岐太、四人、代執雉輿、而進殿前。時左右大臣、就執輿前頭、伊勢王・三国公麻呂・倉臣小屎、執輿後頭、置於御座之前。天皇即召皇太子、共執而観。皇太子退而再拝。

とあり、ついで巨勢大臣の賀奉、天皇の祥瑞の詔に、

穴戸国中、有此嘉瑞。所似、大赦天下。改元白雉。仍禁放鷹於穴戸堺、賜公卿大夫以下、至于令史、各有差。於是、褒美国司草壁連醜経、授大山。并大給禄。復穴戸三年調役。

とある。

このように長門国において一羽の白雉の捕獲とそれが献上されたことにより、その故事来歴や取扱い、意義付けをめぐって意見が述べられ結局「祥瑞」として「白雉」に改元されることになったという。

こうした文献を読むにつけ、この白雉が捕えられた「穴戸国麻山」とはどのあたりであろうか。どのような地形であろうかを知りたいという興味がある。

坂本太郎他編『日本書紀下』（日本古典文学体系68）のこの記述に関する頭注をみると次のように解説されている。

国造は穴門国造、首は名か。国造本紀に穴門国造は桜井田部連と同祖、邇伎都美命の後とある。神功紀に穴門直の祖践立あり。

とし、「麻山」について

不詳。地名辞書は美禰郡赤村（今、山口県美禰郡美東町赤）にあるという。

とする。勿論白い雉という珍しい鳥を獲えた場所であり、現地を調査しても考古学上の遺跡ではないから、特定の地点を究めることはできない。ただ、その場所の現在地形の理解はできるだろうから一度、その「赤」という土地を訪れたいという願望はあった。

平成２年７月６日・７日の両日、長門、周防に赴く機会があり、７日の午前に「赤」という場所に行くことができた。（10月６日にも再度同地を訪れた）

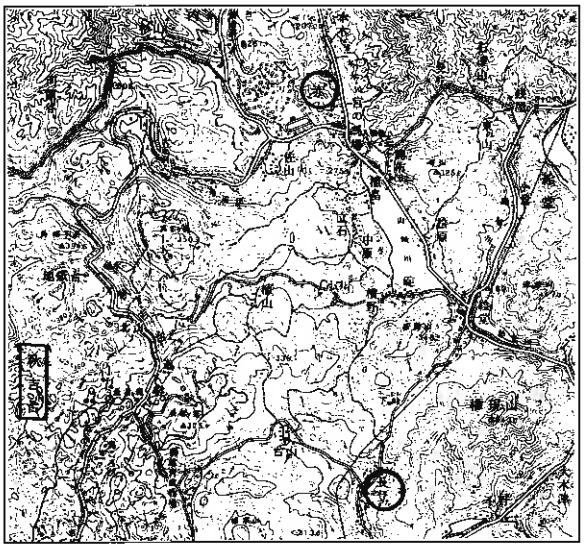
赤付近の地形

日本海に面する長門市から国道191号線を萩市に向い、途中三隅町から別れ、秋吉台、美東町を経て山口市に至る道路を走る。そのほぼ中間点に「赤」という地名がある。この道は起伏する中国山地の間を通過する。

「赤」は「赤郷」とも呼ばれ、低い山地が塁々とする谷間の地形であって、雉の生棲しそうなところである。

ここから少し南に行くと「長登（ながのぼり）銅山跡」がある。昭和47年にそのなかの「大切製錬遺跡」の発掘調査が行われ、奈良時代の土器などと共に銅滓が出土し、銅山跡であることが実証された。その後、昭和63年３月に奈良東大寺の大仏殿西回廊の西側を防災工事の事前調査として発掘調査が行われ青銅滓などが出土した。この青銅滓が長登銅山より採掘した可能性の高いことで話題を呼んだ。

この調査のあとをうけて長登銅山跡では、美東町教育委員会がその年の８月、再び大切製錬遺跡の発掘調査が行われ、地表下約1.8mの位置で奈良時代の作業面を検出、土器などの出土があって、奈良から平安時代に製錬が行われていたことが実証された。



赤と長登（国土地理院地図による）

正倉院文書によれば奈良時代に長門産出の銅26,474斤が東大寺に施入された記録があり、地元の長州藩が編した『防長風土注進案』にも「当村は金山所にて往古奈良の都の大仏を鋳させらるる時大仏鋳造の地金として当地の銅弐百余献貢かしめらる其恩賞として奈良登の地名を賜わり、其比天領にて御制札にも奈良登銅山村とあり、し由言伝ふ」とあるとされている。

こうしたことから「赤」近傍の長登銅山も奈良東大寺との関係が深いことが知られる。

ところで、白雉改元の故地「赤」を訪れた日、知人が地元の新聞記事に長門国の小野田市で全身が白い羽毛で覆われたコウライキジが飼育されているという記事のあることを教示してくれた。まさに現代版「白雉」の出現である。奇しき縁であろうか。

なお、この長登銅山跡の発掘調査は現在も行なわれており、その成果が期待できる。

第三部特保制度

何かいいことありそうな…

「白雉」の里で白いキジ

小野田 川崎さん宅でスクスク

元気に育つ白いキジのヒナ（中央）

【宇部】二羽を産ませるほど珍しいとされる白いキジが小野田市松島、市橋利喜男、川崎一有さん方に生まれ、近所の話題になっている。

川崎さん方には一つがいのコウライキジがおり、今年五月から六月にかけて十六個を産卵。このうち四羽のヒナがかえり、三羽が黄いな色と黒茶色のしま模様だったが、残り一羽が全身白い羽毛で覆われていた。現在は生まれて約三週間、人間の両手のひらに乗るくらいの大きさで、他の三羽より少しはやさが、親鳥や兄弟と鋼鉄小屋で元気にすくすくっていはんでいる。

川崎さんがキジを飼い始めたのは三年前から。白いヒナは一昨年にも生まれた。間もなく発売、さらに昨年は十六個の卵があったものの、一羽も孵化しなかったため、二年ぶりの誕生となった。

山口県のちくからの歴史を伝える風土注進案によると、白雉（はくち）（六五〇）は元号（六四五）の次の年号で、長門国の国司（奈良民）が雉を白いキジと勘じたことから、献上されたらしい。川崎さんは「前回は死なせてしまったので、ずい光に育てたい」と話していた。

平成２年７月６日付　山口新聞の記事

上海・南市の商船会館

松浦　章

Ⅰ　緒言

1990年８月上旬、中国福建省の厦門大学で開催される学術討論会に出席の途上、上海の南市で念願の商船会館の旧跡を見学する機会を得た。ここに些か商船会館の現状を報告してみたい。

Ⅱ　上海・沙船航運業の繁栄

清代の前期以降、上海の巨商のほとんどは、農業によって財産を形成したのではなかったと言われる。最富豪と言われた者は、大小数十隻の船舶を所有し、それらの船舶を関東、即ち東北地方の沿海地域に航行させて、大豆、大豆油、豆餅、酒などの物資を上海方面に輸送した。これらの航海は１隻に付き一年に３～４回も行われ、この航運業が、上海に巨商を生み出したのであった（王韜著『瀛濡雑誌』巻１）。

『ノースチャイナ ヘラルド』第30号、1851年２月22日付の「ジャンク貿易」の中において、

上海と山東との間で大きなジャンク貿易が行われている。毎月山東から上海へ豆やエンドウや油粕が輸送されている。これらのジャンクはほとんど全て上海やその近郊に住む者により所有されている。僅かに山東に住む所有者がいる。この貿易に雇用されている多種類の船舶は少なくとも1500隻にもなる。上海に住む最大の船舶所有者はSing yuhで、彼はおよそ60隻を所有していると報告されている。

と、上海と華北沿海地区とを結ぶ豆貨を中心とした沿海貿易の繁栄ぶりが知られるのである。

上海の巨商が所有していた船舶とは、民国二四年（1935）刊行の『上海縣志』巻11、交通の「航」の項目に、

吾が滬（上海の別称）の帆船のうち、北洋に行駛するものは、沙船と呼ばれ、衛船と呼ばれる。

と、長江河口より北に航行する帆船に、上海付

写真①　南市・商船会館

②　旧時の商船会館

③　商船会館の現状

近では沙船、衛船の二種類の船舶があった。特に、沙船に関して、同書の割註に、

専ら牛荘や天津などの埠頭に航行し、道・咸以前にあっては、邑人の此を業とするもの、多く鉅富をなした。同治以来、この業が日々衰退し、船も日々減少していった。

と、遼寧省の牛荘や河北省の天津等に進出しており、その盛時は道光、咸豊年間以前、即ち19世紀中頃以前であった。沙船の航運経営によって巨万の富を成す者も多くいたのであった。しかし、19世紀後半の同治年間以降は沙船航運経営も衰微したとされている。

沙船と呼ばれた平底帆船が清代前期以降活躍した背景には、上海の産業構造と密接な関係があった。上海が経済的に繁栄していた要因の一つに餅豆業があった。『上海碑刻資料選輯』(1980年刊) 二八二頁に、

由沙船運諸遼左・山東、江南北之民、倚以生活、磨之爲油、圧之爲餅、屑之爲菽乳、用宏而利溥、率取給于上海。

とあるように、東北地方や山東方面から沙船によって、江南地域にもたらされた大豆は、豆油、豆餅、菽乳等と多様な用途に用いられ、上海地域に多大の利益をもたらした。これらの産業を支えたのが、上海近郊の帆船、即ち沙船であった。

その沙船の所有者等によって上海の南市に建てられたのが、商船会館である。商船会館が設立された地は現在上海の南市区と呼ばれる地にあたる。南市区は黄浦江の左岸にあり、上海では古くから商業の発達した地域であった。

④　商船会館の屋根裏装飾

⑤　商船会館の屋根

民国初期の姚公鶴の『上海閑話』によれば、上海の南市は黄浦江に面し、外海との交通も至便であるため商業区域として早くから発展し、米・麦・雑穀・豆・竹・木・薬剤などを扱う商店が多数集まっていたことを記している。現在も上海の重要な経済地域である。

南市地区には商船会館のみならず、多くの商人会館が設立されていたことは『上海碑刻資料選輯』にも明らかである。

Ⅲ　商船会館の設立

商船会館が設立された経緯について、『上海碑刻資料選輯』所収の「重修商船会館碑記」(以下「碑記」と略す) や、民国の『上海縣続志』巻三、建置下、会館公所の「商船会館」(以下『続志』と略す) の記載によって知られる。

「碑記」によれば、

吾邑商船会館、崇奉天后聖母、其大殿戯台、創建于康熙五十四年、洎乾隆二十九年、重加

⑥　商船会館の床タイル

修葺。

とあり、また『続志』に、

商船会館在馬家廠、康熙五十四年、沙船衆商公建崇奉天后、乾隆二十九年、重修大殿戲戲台、添建南北両庁。

とあるように、商船会館の基礎は、康熙五四年（1715）に大殿の戲台が建設されたことに始まる。その後、乾隆二九年（1764）に重修が行われ、戲台の南北に各庁が添設されて、基本的な形状が出来上がったのである。

その後の経過は、「碑記」や『続志』によると、嘉慶十九年（1814）に二つの看楼が建設されている。道光二四年（1844）には、拜庁、鐘鼓楼、後庁、南台等が建造された。

同治元年（1862）には、外国の兵隊が商船会館に駐屯し、撤兵後は制造局が同治五年（1866）まで置かれた。制造局が他に移転した後、商船会館の殿庁が毀損された。しかし、同治七年（1868）に重修が行われた。

その後、光緒十六年（1890）に台風によって、戲台は被害を受けたが、重修された。そして、光緒十七、十八両年（1891、1892）にわたって天后宮は大修理されている。

以上が、上海・南市の商船会館の概略である。

商船会館の跡地は、1987年11月に上海市人民政府の公布によって、〈上海市文物保護単位〉に指定された（写真①）。商船会館は『続志』によると「馬家廠」に設立されたとあるが、現在は「会館碼頭街」である。商船会館の前の敷地に、現在三階建の建物が隣接している。『上海碑刻資料選輯』掲載の写真（写真②）によって、現状（写真③）の旧時を偲ぶことができる。旧時の商船会館の中庭であったと思われる部分にも別の建物があり、正確な建物配置の確認は困難であるが、屋根の部分は旧時の状況を残している（写真④）。内部の一部は現在、紡績工場に使用されているが、屋根裏部分の装飾（写真⑤）や床のタイルの文様（写真⑥）にかって栄えていた商船会館の様子を偲ばせてくれる。

道光年間以降、商船会館の主要会員の一員であったのが、上海の沙船業の巨商郁家である（以下、松浦章「清代末期の沙船業について」（『関西大学文学論集』第39巻第3号、1990年2月）参照）。

郁潤桂は嘉慶年間から道光年間にかけて活躍したと思われる沙船業主であり、彼は沙船を七十余艘所有し、そのための雇い人が二千有余人もいた巨大船商であった。

郁潤桂の長男の郁彭年は竹泉と号し、また商人仲間では、郁森盛とも呼ばれた道光年間の上海を代表する沙船業の巨船商であり、道光十七年（1837）三月には上海縣城の城隍神廟の劇台建設にも巨額の基金を提供している。

郁潤桂の次男の郁松年は泰峰と号し、咸豊八年（1858）当時、少なくとも五十余隻を所有する巨船商であったことが知られる。彼は、船商としてよりも、『宜稼堂叢書』を刊行した人物として、また蔵書家として著名である。郁松年の死後、彼の蔵書の一部は、清末の有名な蔵書家であった陸心源の蔵書となり、その後日本に舶載され東京町田市にある静嘉堂文庫の所蔵となっている。

上海の主要産業であった餅豆業の原料を東北地方方面から上海に輸送し、それと共に繁栄してきたのが沙船業であった。阿片戦争後進出してきた外国船に対し、清朝は〈豆禁〉として、東北地方の豆貨等を輸送するのを禁じ、中国国内の船舶による輸送に限定したため、沙船の存続は確保された。しかし、同治元年（1862）に外国船に対する〈豆禁〉が解除されると、それまで繁栄を誇っていた沙船業も大きな打撃を受けたのであった。

Ⅳ　小　結

上述のように、上海・南市の商船会館は、清代前期より末期にかけ上海の経済発展の根幹を担っていた帆船沙船業主等の航運業繁栄の象徴的存在であった。しかし、近代的航運業の発展にともない、商船会館も歴史的遺物となっていったと言える。

今回、商船会館の参観にあたりご尽力頂いた上海市高校芸術交流中心副総幹事長の陳輝氏、南市芸術学校副校長の潘立氏、上海大学歴史系講師の陳波氏等に末筆乍ら謝意を表する次第である。

金石文拓本（龍門石窟資料）

本学資料室には多数の金石文拓本を所蔵している。折にふれて紹介しているが、本学 の金石文拓本の資料は『日本金石史』全6巻の著者本崎好尚氏の所有されていたもので、「好尚所拓」の印が全資料に押されている。その後本山彦一氏（元毎日新聞社長）へ譲られ、本山氏より本学が考古資料民族資料等とともに購入したものである。中国関係資料は本山氏自身中国へ旅行の折蒐集されたもので、各地の遺跡、墓碑の拓本である。その中でも特にまとまって所蔵しているのが「龍門石窟」の拓本であり、その数744点である。龍門石窟については京都大学東方文化研究所より『龍門石窟の研究』の大著が出されており、多くの後学の士の指針となっている。また中国において『龍門石刻圖録』なども発刊されており、この遺跡についてもその全貌が明らかにされている。書学方面よりの研究も盛んで、龍門石窟50品、30品などとして書道の手本にも応用されている。この資料はその他当時の庶民生活や、社会相、信仰史の探究にもこれらの資料により解明の糸口がある。この碑石、墓碑、石塔などは長年の風雨に碑面の損傷が進み、原刻の状態を残さない現在、これらの拓本が残っているのは貴重な資料である。

この「石刻造像記」の内訳をみると古陽洞136片、火焼洞48片、薬方洞55片、魏字洞86片、敬善寺洞99片、萬佛洞54片、老龍洞109片、小洞71片、蓮華洞80枚、奉先寺洞４片、石窟洞１片、賓陽南洞１片、浄土洞２片であり約750点を所蔵する。年号銘が存している最古のものは「古陽洞」の「北魏楊安族造釈迦像記」で正始２年正月30日（西暦505年）銘のものである。他に正始２年より５年までの資料が６点、永平元年（西暦508年）より５年までのものが13点存する。いずれも釈迦、弥勒などの像記である。有名な露座の大盧舎那佛（高宗大盧舎那佛造龕記）の拓本資料もあり、開元12年12月12日（722）（奉先寺洞）のものである。

これらの資料は昭和55年当時の文学部壷井義正教授にお願いし整理分類していただいたが、大型封筒に入れ、ファイリングキャビネットに収納していたので保存は良くなかった。近年その保存状態が問題となり、早急に適正な処置をしなければ、貴重な文化財が失してしまうので、表装し適正な温度で保存するよう指摘された。従来より若干は予算を計上して表装してきたが、多数の資料のため、限られた数量しか完成しなかった。来年度より若干、従来の予算に上乗せし表装を行なうことになった。表装が完成した暁には龍門石窟資料展として一般公開なども考えられている。また学術資料としても貴重な拓本であるので、紹介していきたい。

敬善寺洞 唐季大娘造像記（顯慶４年）

蓮華洞 北魏比丘静度造像記（普泰２年）

中国「うるし」の旅－長沙へ－

高　橋　隆　博

今年の８月下旬から９月上旬にかけて江蘇省と湖南省を訪れた。本年春から夏にかけて万博公園エキスポランドで開催された「中国長沙馬王堆漢墓展」が旅行の直接のきっかけとなった。1972年、湖南省長沙市の東郊外で発見された馬王堆漢墓は、「今世紀最大の発見」と評され、世界中の耳目を驚ろかせたことは今さらながらに記憶にあざやかである。その発見以来、海外で初めて開かれたのが今回の展覧会であった。

私達は梅雨に入ったある日会場に出向いた。私達とは「漆の会」のメンバーのことである。４年ほど前から、中国漆芸技術のバイブルとでもいうべき、明代の『髹飾録』を読んでいる。漆芸作家、文化財や仏像の保存処理と修覆に関わっている者、大学・研究機関に籍を置く者と多彩な一言居士ばかりで、それだけに思いもかけない意見が飛びかうことになる。ただ大方は、中国古典籍に門外漢なので、こちらの方は、もっぱらその方面の専門家の奈良女子大学松尾良樹助教授にすっかり頼り切ってしまっている。煩いの全てを背負い込んでの松尾さんは、好き勝手に放言する私達に切歯扼腕しているにちがいないのである。もっとも、研究会後の酒席につられて寄り集まっている会ではある。

展覧会では、湖南省博物館副館長傅舉有、同省文物事業管理局文物科長胡樹旗の両氏のご案内をいただき、答礼として、その夜ささやかな酒宴を開いた。いつの日にか意見交換会を持ちたいものだということが、その晩の懸案となった。その後、帰国した両氏と連絡を取り合うなかで、湖南省文化庁並びに同省人民政府から「中国漆工芸及文物保護国際学術討論会」への招請状が届けられたのは８月上旬であった。

開会前に、上海、蘇州、南京の主だった博物館、遺跡、寺院などを見学した。新石器時代から現代までの質量共に圧倒的な、就中圧巻たる青銅器群の上海市博物館に驚嘆して、次に訪ねたのが蘇州博物館。目的はただ１つ、1978年蘇州市瑞光寺塔第三層塔心窖穴から発見された黒漆螺鈿経箱にある。螺鈿が唐代に盛行したことは、『安禄山事迹』や我国正倉院の20例ほどの螺鈿器のほとんどが唐代のそれなのであるから、今さら強調するまでもない。ところが、肝心の中国においての唐代遺例は極めて少ない。伝世品はいうにおよばず、出土品も河南省洛陽澗河西16工区、同省三門峡市区、陝西省咸陽県興平の各唐墓出土の三例の螺鈿鏡を数えるにすぎない。宋代では、方勺著『泊宅編』に「螺鈿器本出倭国物象百態頗極工巧」とあるように、日本に源流があると認識されていたほど低調であった。唐代にあれほど盛行していたにかかわらずにである。

さて、瑞光寺塔の黒漆螺鈿経箱は、塔の建立（北宋）と経巻の年代とを勘案して、10世紀後半から11世紀前半と考えられている。しかし、花鳥文や連珠文の意匠、毛彫螺鈿と平文（平脱）などの技法、いずれも唐朝のそれを踏襲している。いな唐代に置いてもよさそうに思うほどである。とすれば、宋代に螺鈿器が衰退したとするのは、また唐代に漆地螺鈿が行われなかった

馬王堆木槨

蘇州瑞光寺塔出土黒漆螺鈿経箱

とするのは改めなければならない。因みにさきの出土螺鈿鏡も漆地ではない。ともあれ、唐・宋の両代における螺鈿技法をうかがうに、極めて示唆的かつ重要な立場にある経箱なのである。状態が良好でないということで、複製品（福州で製作）が陳列されていた。

南京博物院では、良渚文化（漆塗陶器）から清代までのほぼ80点の漆器を仔細に拝見し、さらには館員の方々と終日交流を持ったことは有意義であった。また、南京東北郊外、南北朝・梁墓の辟邪（石造有翼獅子像）も忘れ難い。有翼文はスキタイ文化を本源とし、その影響のもと、中国では戦国時代に出現し漢代ことに後漢に流行した。辟邪の有翼は陽刻と陰刻の二種があった。陽刻が陰刻に先駆けるものと考えていたのだが、陰刻有翼辟邪の方が、その量感において、デッサンの初発性においてすぐれている。つまり、写実的な動物文をその美術的特徴とするスキタイ文化に近いのである。今後の宿題となった。ふと百済武寧王陵出土の鎮墓獣（高30、長47m）が有翼一角獣だったことを想い出した。これは明らかに梁の影響である。武寧王は梁の武帝に朝貢使を遣し、武帝から寧東大将軍に除されているのである。『梁書』の「百済伝」の記するところである。

南京で機上の人となり、暫らく長江を眼下にする。窓に顔を押し当て、これが盧山、鄱陽湖、あれが洞庭湖と想いを馳せて飽かず眺めた。2時間ほどで長沙空港に着陸。石の一個だにまじっていそうにない赤茶色の大地が印象的。周囲には何もなく見はるかす大平原。東に武夷、南に南嶺の山なみがかすかに見えている。空港には、さきの両氏と湖南省文物事業管理局弁公室副主任王沅沅女史が出迎えてくれた。長沙の夜を芙蓉賓館に投じる。

梁墓の辟邪

翌日、湖南省博物館、高至喜館長を表敬訪問。歓談後、馬王堆出土漆器と漢代漆器を拝見。そして、博物館と馬王堆漢墓出土文物陳列館、さらには馬王堆遺跡を見学する。

次の日、「中国漆工芸及文物保護国際学術討論会」が博物館で開かれた。湖南省文化庁長官、同省文物局々長をはじめ、同省の文物行政、管理、研究機関の主だった人たちが列席された。討論会の発表者は次の通りである。

「『髹飾録』について」　奈良女子大学松尾良樹

「中国・日本・朝鮮の螺鈿」　関西大学高橋隆博

「正倉院の漆芸」　正倉院事務所木村法光

「漆使用の起源」　奈良国立文化財研究所工楽善通

「リンデン民族博物館蔵中国古代漆器」　漆芸作家北村昭斉

「出土漆器の化学分析」　京都市埋蔵文化財研究所岡田文男

中国側

「漢代漆器芸術」　湖南省博物館美術工作部部長李正光

「漆木器溶剤脱水法探究」　湖南省博物館技術部副主任魏象

以上で、終日にわたっての質疑応答があった。

夕刻におよび、当地出身のかっての指導者故毛沢東が長沙に帰郷した時、必らず立ち寄ったという、「火宮殿」で湖南省文化庁、同文物管理局、同博物館主催の晩さん会が盛大に催された。ホテルへの帰路を全く記憶していないのですっかり酩酊してしまったらしい。

私の中国漆芸の旅は、今ようやくはじまったばかりである。今回の中国側が示されたご厚情に感謝する以外にない。この友情を今後の研究にいかしていきたいものである。

馬王堆出土漆耳杯（部分）

一枚の記念写真

(京都円山の左阿弥における羅振玉の送別会の人々)

角　田　芳　昭

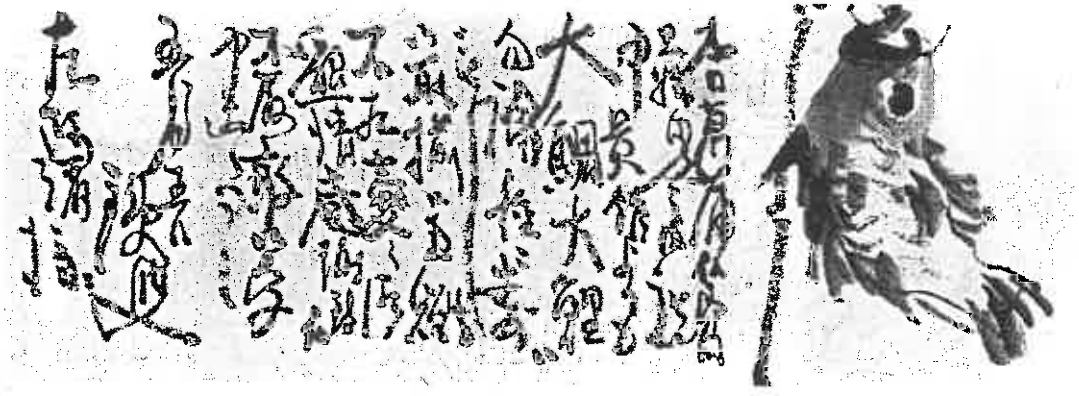
平成２年８月11日より９月９日まで岡山県立美術館で開催された「富岡鉄斎展」を出張の折見学する機会を得た。この展覧会は宝塚清荒神清澄寺コレクションのうち画、書、器玩など126点を展示解説しており、鉄斎芸術を研究する上で非常に参考となるものである。

富岡鉄斎は幕末、明治、大正の激動期を89才まで生き、近代日本最大の文人画家といわれている。「萬巻の書を読み、萬里の道を往く」を実践し、博学多識、大低の絵画に絵と関連する説明ともいうべき賛をかいており、その優れた詩文は格調高いものである。比較的時間に余裕があったので順々に見学し、最後のところで珍しい写真に出逢った。大正８年（1919）６月、日本を離れることになった中国の金石学者、羅振玉氏の歓送会の記念写真である。（図②）羅振玉を中心に向って右へ鉄斎、その右側へ内藤湖南、左側は犬養木堂（毅）、長尾雨山の諸氏であり、当時の著名な人達である。筆者の興味のある人物が一同に会した記念写真であるので、ここに紹介してみたい。

羅振玉（1866～1940）は清末、中華民国初期の考証学者で金石文学に造詣が深かった。字は叔言、号は雪堂、貞末老人、松翁ともいった。浙江上虞の人で、経史の学を修め、全石学を修めた。明治34年（1901）来日し、日本の教育事情を調査した。また故国においては殷代の甲骨文字、その他の遺物の蒐集研究をすすめ、王国維の協力を得て甲骨文字の解読研究に先駆的業績を残した。辛亥革命で、清朝が崩壊するに際して一家をあげて日本に亡命し内藤湖南、狩野直喜ら知人の庇護のもとに８年間にわたり京都に在住し、研究生活を続け、日中間の学術交流に尽した。

中国にあっては甲骨卜辞の第一人者として位置づけられ、『殷周書契』において青銅文字と甲骨卜辞の双方を比較研修し、また動物を表示する象形文字からも研究していった。これらの研究が先王朝殷周代の歴史を裏づけるものとして評価される。羅は日本の多くの知人、すなわち中国史学を研究する学者、文人あるいは書画を研究する人々と交わって、研究を行い、交友を深めた。その帰国に際して送別会が催され多数の参加者があった。

即ち大正８年（1919）６月21日京都円山公園内料亭「左阿弥」において開催し、会する者は京都大学関係者、新聞社出版社関係、友人、知人等であり、総勢38名であった。（別の記念写真による）そして特に羅振玉と親しかった４人が並んで別に写真をうつしたのがこれである。



図①　左阿彌主人へ鯛の送り物の御礼状（大正12年５月５日）『書道クラブ』299号より

図② 大正８年（1919）６月21日・京都円山公園の料亭「左阿弥」における羅振玉の歓送会
左から長尾雨山・犬養木堂(毅)・羅振玉・富岡鉄斎・内藤湖南(岡山県立美術館『富岡鉄斎展』図録より)

羅振玉52才、内藤湖南・長尾雨山54才、犬養木堂63才、鉄斎が最高令で84才であった。この４人についてかねがね興味を持っており、木堂については郷里の偉人として尊敬しており、鉄斎については南画研究の対象として、また湖南については史学において、雨山は中国書画研究の人として若干の知識を持ち合わせていた。そこでこの機会にそれぞれの関係について書いてみたい。この４人に共通していることは「能書家」であることだ。長尾雨山は鉄斎の墓誌銘を書いており、湖南は木堂の墓碑銘を書いている。表に「犬養木堂之墓」裏に「備中庭瀬人、安政二年四月廿日生、昭和七年五月十五日歿、享年七十八」と縦書４行に彫られている。この揮毫については次のように博文堂主人原田悟郎氏が語られている。

図③ 京都円山公園内料亭「左阿弥」

あの五・一五事件の後、わたしは湖南先生をおたずねして、事件の詳細を言上し、墓石の揮毫をお願いし、わたしが墨をすりました。最初の一枚は涙が紙上に落ちてにじみましたので、先生は「これでは犬養さんに申しわけない」と言われ、もう一度、顔を洗って揮毫されたのが、青山墓地に刻まれているものです。それを持って、ふたたび東上し、わたしの父に手渡したのです。…（中略）…木堂先生もあの世で

ご満足のことと信じます。墓石は木堂先生のご遺志のとおり、高さ三尺五寸の小さなものです。ふたりは生前、生き残った方が墓石に文字を書こうと誓いあっておられたという。湖南は涙をぬぐいながら約束どおり木堂の墓石の文字を書いたが、彼自身もそのころより身体がおとろえ、2年後の昭和9年6月26日京都城南の恭仁山荘で逝った。69歳の生涯であった。図⑤の書は大正4年（1915）1月、木堂が湖南邸を訪れた際のもので、同席者が一筆依頼したことに対して「動中静、静中動」と書れた。湖南博士は「面白いことを書きましたね、対句になるよう考えずばなるまい」といわれ一氣呵成すなわち「忙裏閑、閑裏忙」と書かれた。両者の胸中、かくの如く相識れていたのである。この4人の中では比較的名を知られていないのが長尾雨山である。長尾雨山（1864～1942）は名を甲、字を子生といい、元治元年（1864）讃岐高松藩に生れ、東京帝国大学古典講習科を卒業、第五高等学校教授、東京高等師範学校教授など歴任し、清国の商務印書館の招聘を受け上海に渡り、教科書の編纂等に携わるとともに、中国書画の研究を行なった。同時にわが国文化を紹介し、清国での評価が大きい。大正2年（1913）帰国し、京都に住み翰墨生活に入り、平安書道会副会長などを努めた。書画の鑑識において造詣が深く、著書に『中国書画話』がある。後世の書家達が参考としとしている名著である。この彼が帰国して蘇東坡の学問、芸術、徳業をしたい、東坡の生誕日（陰暦2卯12月19日）に「壽蘇会」を催すことにした。まず富岡桃華（名は謙蔵・鉄斎の長子）が双手をあげ賛成し、雨山との連盟で第1回の会を大正5年1月23日に催すことになり、友人、名士に案内状を出した。場所は前述の祇園円山「左阿弥」であった。

当日参会した客は京都から富岡鉄斎（百練）、山本竟山（由定）、羅叔言（振玉）、内藤湖南（虎次郎）、狩野君山（直喜）、上村閑堂（観光）、王静庵（国維）、羅公楚（福長）、の8氏、大阪から磯野秋渚（惟秋）、西村天囚（時彦）の2氏、主人側は桃華、雨人の2人の12人で、当時の風流雅人ばかりであった。大阪の博文堂主原田大観（庄左衛門）が周施をし、左阿弥楼主も協力した。東坡に因んだ書画を皆持寄り披露した。これが「大正乙卯壽蘇会」の第1回であり、翌大正6年1月12日（陰暦丙辰12月19日）の坡公生日に第2回を催した。第1回は上々の成果を収めたので、会場も左阿弥で催され、京都から富岡鉄斎、山本竟山、榊原鉄硯（造逸）、江上瓊山（景逸）、高野竹隠（清雄）、桑野城（箕）、羅雪堂、羅公楚、大阪から上野有竹（理一・朝日新聞副社長）本山松蔭（彦一・毎日新聞社長）、籾山衣洲（逸也）、磯野秋渚、西村天囚、兵庫

図④　長尾雨山書　「書論」13号より

図⑤　木堂・湖南寄せ書き　「書論」13号より

から小川簡斎（挙次郎）、主人側は桃華、雨山と原田大観であった。特に朝日新聞、毎日新聞社のトップが参会していることは特筆すべきであり、両人とも風雅を心得た人であった。（後に本山松蔭翁所蔵の「考古学資料」約1万点が関西大学考古学資料室に納まり活用されている。）鉄斎の誕生日の12月19日は偶然にも蘇東坡の誕生日でもあったので、若いころから東坡研究を行ない、また著述、骨董類も蒐集しており、「東坡同日生」という印まで彫っている。この第2回壽蘇会にも東坡関係の書画典籍を陳列しているが、この時は長子桃華とともに参会できたことに非常に満足し、図⑥の「蘇子笠屐図」の画を描き左阿弥楼主に贈っている。その賛に蘇東坡が雨に逢い、農家より笠を屐を借りはいたところの図であり、「大正6年1月12日壽蘇会を東山左阿弥に開く、即ち夏生十二月十九日、蘇子の生日の為す、故に此れを写きて楼主に贈る。八十二才、鉄斎百練。」第3回壽蘇会は大正7年1月31日開催されたが桃華不在で雨山一人が主催した。桃華が健康を害したことが原因といわれている。12人の参会者があった。第4回は大正9年2月8日前3回と同様円山公園左阿弥で開かれた。前々年の12月29日忽然とこの世を去った富岡桃華の死を悼み、2年ぶりの開催であった。以降開催された記録はない。4回とも出席したのは主人側の雨山と友人の内藤湖南のみであった。左阿弥は織田有楽斉の二男頼長で茶道への道に入りこの地へ住み料亭「左阿弥楼」となり江戸時代元禄の頃多いに栄えた。文人墨客の会合は常にここで催された。湖南の蔵書と晩年移り住んだ「恭仁山荘」を関西大学が譲り受けたことも奇縁であり、この一枚の写真より多く知識が得られた。誌面の関係で紹介のみで終った。機会があれば資料室紀要8号へ再度業績、交友関係等をくわしく書いてみたい。

図⑥　富岡鉄斎筆　蘇子笠屐図82才『富岡鉄斎展図録』より

図⑦　内藤湖南書「恭仁山荘」雑詠『書論』14号より

資料室公開講座について

第１回考古学等資料室公開講座が開催され、多数の受講者の参加があり盛会でありました。

考古学等資料室では過去２回公開講演を行ない、大学の研究成果を発表し、地域住民の社会教育に寄与してきましたが、このたび100周年記念会館が建設されたので、これを機会に公開講座を開催することが管理運営委員会で了承され、大学事業局と共催で開催されることになりました。また関西大学文化学術振興会が協賛下され、充実した公開講座を運営することができました。講座の内容は考古学の研究課題や旧石器時代より歴史考古学までの全時代の研究の課題と方法を解り易く講演され、受講者の好評を得ました。講師は本学関係者及び卒業生で研究機関等へ勤務されている人です。同時にアンケートを実施し、それらの意見を参考に来年度以降の公開講座を充実していきたいと考えています。

近年考古学・歴史学に関した報道記事も多く、受講された方も18才より85才までの年令で、40代、50代の人が約６割で、内容についても、専門的知識をとり入れ、講演してほしいとの意見も多くありました。今後の受講希望も多く、レジュメなどを資料にし入門講座の出版も希望されているなどの意見もありました。来期の第２回も諸先生方のご指導と、事業課、振興会の応援と共催で、新しい企画のもとに続けていきたいと考えています。

第１回入門講座開講式

満員となった初回の100周年会館会場

関西大学100周年記念会館

平成２年度　関西大学考古学等資料室公開講座
第１回「考古学入門 講座」

日　程	テ　ー　マ	講　師
11月３日(土)	考古学研究の課題と方法	関西大学教授 網　干　善　教
11月10日(土)	旧石器・縄文文化研究の課題と方法	奈良県立橿原考古学研究所副所長 石　野　博　信
11月17日(土)	弥生文化研究の課題と方法	芦屋市教育委員会学芸員 森　岡　秀　人
11月24日(土)	古墳文化研究の課題と方法	奈良県立橿原考古学研究所　総括研究員 河　上　邦　彦
12月１日(土)	歴史考古学研究の課題と方法	奈良国立文化財研究所平城宮跡 発掘調査部長 町　田　　章

○　日　　時　／　11月３日（土）より連続毎週土曜日
14時～16時　　11月３日（土）13時30分より開講式

○　会　　場　／　関西大学 100 周年記念会館　（吹田市千里山学舎内）
（11月24日のみ文学部2号館125番教室に変更）

○　参 加 費　／　3,000円　（５講座分・資料代等一切を含む）

○　定　　員　／　300名　・満員になり次第締切り

○　申 込 み　／　往復ハガキに「資料室公開講座」と明記し、住所、氏名、年令、性別、電話番号を書いて　〒564 大阪府吹田市山手町３丁目３－35
関西大学考古学等資料室へ10月９日(火)までに申込んで下さい

○　問い合せ　／　関西大学考古学等資料室　☎06－388－1121（内線　3341）

※　講義期日中「考古学等資料室」を特別公開します（12時～17時）

主催　関西大学考古学等資料室・関西大学事業局
協賛　関西大学文化学術振興会

資料利用状況

●鞍塚古墳・珠金塚古墳出土資料・復原甲冑等160点
特別展「倭の五王とその時代」展へ
平成２年10月８日から11月30日まで
池田市立歴史民俗資料館へ貸出

●川原寺出土「塼佛」（本学保管）16点
特別展「塼佛」へ
平成２年10月20日から11月18日まで
鳥取県倉吉市立博物館へ貸出

●藤井寺市国府遺跡出土の「頭骨石膏模型」１点
『発掘の迷路を行く』発行図書（毎日新聞社）
平成２年７月16日　掲載許可

編集後記

『阡陵』22号をお届けいたします。難産の末ようやくここに完成いたしました。原稿をお願いしました諸先生に改めてお礼申し上げます。

今年度資料室の最大目標であった公開講座も無事好評のうちに終了し、一同ほっとしています。学校法人事業局、100周年記念会館、文学部及び関西大学文化学術振興会の方々のご指導ご協力により、定員（300名）を約２倍上廻る申込者があり、会場は熱氣につつまれていました。またこの期間中「考古学等資料室」も公開していましたので多数の見学者があり、講演を聞き、そして資料を実見できて非常に有益であった、立派な施設であるので、一日も早く一般公開してほしい、との声が多く関係者として恐縮しました。博物館相当施設として一般公開ができるよう、関係者の一層のご指導、ご支援をお願い致すものであります。

資料整理も順調に進んでおり、「金石文拓本」の表装、資料の充実と展示目録の作成など、専門家のご指導のもとに進行しています。

表紙の資料は「環鈴」であり古墳時代中期、後期に多くの発見例があります。しかしその出土例は全国でも50例程度で九州と関東に約半数出土しており貴重な資料です。三環鈴と四環鈴があり、５世紀代のものは小型で６・７世紀になると大型化してきます。用途については諸説があり、馬具の装飾説、挂甲に接して出土した例もあり、腰部へ垂下されたことも考えられています。青銅製で鈴の中に石丸が入っており、音も出ます。径4.5cmの鈴が、直径3.5cmの環に直接付き、環は一部が細くなっています。　〔角田芳昭〕

関西大学考古学等資料室彙報　No.22　平成２年11月30日　発行
関西大学考古学等資料室　編集
㈱ 関西廣済堂　印刷